

授業の力量形成に関するライフヒストリー研究(その4)

— C氏の体育授業を中心に —

木原成一郎・大後戸一樹・中西紘士
(2020年10月5日受理)

A Study of Life History on the Professional Development of Teaching: Part 4
— Focusing on teaching in physical education of an elementary school teacher C —

Seiichiro Kihara, Kazuki Osedo and Hiroshi Nakanishi

Abstract: This study aims to clarify the experiences that helped Elementary School Teacher C hold his belief of teaching in physical education as an elementary school teacher for 19 years. The following points summarize the findings. First, after starting on the new post of an elementary school physical education specialist at K University Attached Elementary School in April 1998, Mr. C formed a view on physical education that the aim of physical education was the acquisition of exercise skill, not the competitive advantage which the acquisition of exercise skill provided. At the same time, Mr. C, following his views on physical education teaching, devised teaching materials and guided his students to achieve the targets he set for them. Second, Mr. C was affected by exercise instruction and the views of Mr. Motohiro Yamauchi on pupil, which transformed his views on physical education. Mr. C started providing students time for basic movement as warm-up exercise and gave them chances to push themselves. This transformation resulted with him noticing that the role of the classroom teacher included understanding the sensitive side of students and thinking of ways to observe and understand the exercise by classroom children through an understanding of exercise by his own children, in addition to the interchange through lesson study with Mr. Motohiro Yamauchi.

Key words: Life History, An Elementary School Teacher, Professional Development of Teaching in Physical Education, Belief of Teachers

キーワード：ライフヒストリー、小学校教師、体育授業の力量形成、教師の信念

1. はじめに

1-1. 授業の力量形成と「授業スタイル」

本研究は、木原ら(2016, 2017, 2018)の続報である。そのため、研究の目的の説明に必要な点のみに限定して問題の所在を述べる。本研究は、C氏の体育授業を対象に、「専門的な知識や技術」に加え「構えや態度」を含む包括的な「授業の力量」(藤原顕, 2007, pp.8-9.)の形成と変容の過程を把握することを目的とした。そのため、「教師の教育観、授業観、子ども観といった観の世界と技術も含む具体的な方法論が一体となっ

たもの」(森脇, 2007, p.172.)と定義された「授業スタイル」に着目した。

森脇健夫(2007, p.175.)は「授業理解の4つのアプローチ」を「対象理解のスパン」に応じて、「(i) 1時間の授業」「(ii) 1単元の授業」「(iii) 授業者の授業スタイル」「(iv) 授業者のライフヒストリー」と提案した。そして、「(iv) 授業者のライフヒストリー」という「対象理解のスパン」では、「授業者の授業の歴史をインタビューで明らかにし、過去の授業記録、現在の授業記録であとづける。」ことを「理解の方法」として用いることにより、「授業者の授業、授業スタ

イルの生成と変容を授業者固有の文脈において明らかにすることが可能」となると示されている。

1-2. 教師のライフヒストリー研究

教師のライフヒストリーとは、「教室・学校における実践歴や、地域・社会における生活歴を含むその個人史の全体」であり、「授業実践経験の歴史そのもの以上の内容を含む」(藤原顕他, 2007, p.16)ことを記述する方法である。それゆえ、教師のライフヒストリー研究は、授業の力量形成にとどまらず、教師の力量形成全体を包括的に研究する。例えば、山崎(2002)は、同世代の教師集団であるコーホートに着目した教師のライフコース研究において、同世代の教師の成長過程の共通性と教師個人のライフヒストリーに見られる多様性を教職生活全体にわたって描き出した。また、高井良(2015)は、中年期の危機を迎えた高等学校教師のライフヒストリー研究を通して、高等学校の制度改革の中で自己の教職のアイデンティティーの危機を乗り越え再生する高校教師の姿を描き出した。

本研究は、教師の専門職としての力量が最も問われる授業の力量形成に焦点化し、森脇健夫(2007, p.175)の提案した「授業スタイル」の形成と変容の過程を明らかにするために、教師のライフヒストリーの方法を用いる。なお、本稿はC氏を対象とした本研究の第1報として、「授業スタイル」の形成の基盤となる教師としての信念(教師観、体育観、授業観、子ども観)の内容とその信念をもつにいたった契機(影響を与えた児童・生徒、人物や理論)について報告する。

2. 研究の方法

2-1. 研究の対象

対象とするC氏は、表1に示すように、1968年に生まれ1991年3月にK大学教員養成学部を卒業後、同年4月にK大学大学院学校教育研究科に入学した。その後1993年4月にL町立のM小学校教諭として24歳で採用された。4年後の1997年4月にN町立O小学校に転動して1年後の1998年4月に29歳でK大学附属小学校に体育専科教員として採用された。K大学附属小学校は、低学年で学級担任が担任学級の国語や算数を担当する場合を除き、すべての教科を専科教員が担任する教科担任制をとっている。C氏は、2012年4月に43歳でK大学教育学部准教授として転出するまでの14年間、学級担任を務めるとともに、体育専科教員として体育授業を担当した。

表1 C氏の学歴及び経歴

年月	学歴及び職歴
1968/6	出生
1984/3	市立D中学校卒業
1987/3	県立E高等学校卒業
1991/3	K大学教員養成学部卒業
1993/3	K大学大学院学校教育研究科修了
1993/4	L町立M小学校教諭として採用
1997/4	N町立O小学校教諭に転勤
1998/4	K大学附属小学校体育専科教員として採用(1998/4から2012/3まで14年間学級担任、体育専科教員として勤務)
2012/3	K大学教育学部准教授に転出
2012/4	K大学教育学部准教授に赴任(現在に至る)

2-2. 資料の収集

第1に、C氏がこれまでに書いた体育授業に関する授業研究の主な文献159編を収集した。さらに、C氏のライフヒストリーの年表を作成し以下の項目について記述した。それは以下の4項目であった。1)小中高等学校及び大学学部・大学院時代の体育学習とスポーツ活動の概要、2)体育授業研究の文献名と概要、3)公立小学校及びK大学附属小学校時代の同僚関係、校務分掌、公開研究会の発表等の勤務状況、4)民間教育研究団体及び大学教員や学生との共同研究の状況。

表2 インタビューの概要

	期日	参加者	内容
第1次インタビュー	2019/8/27 3時間20分	C氏, 調査者	教職への志向性、教師としての信念
第2次インタビュー	2020/1/8 2時間	C氏, 調査者、 D氏	第1次インタビューの解釈についての意見交換と修正
第3次インタビュー	2020/3/27 2時間30分	C氏, 調査者、 D氏	授業スタイルの形成と変容について

第2に、その年表をもとに、C氏へのインタビューを実施した。インタビューは、表2のように、第1次、2次、3次と3回実施した。インタビュアーは必要に応じてC氏に質問するとともに、C氏の意見を引き出すために必要な解釈や意見を述べることに留意した。つまり、主な話の順序であるシナリオは決めるが面接者が必要だと判断すれば質問をしたり、インタビュアーの応えの意味を確認しながらすすめる「半構造化面接法」(鈴木淳子, 2002, pp.24-25.)の形式で行った。そしてインタビューを文字にしたトランスクリプトを作成した。

第1次インタビューは、2019年8月26日にC氏の勤務大学の演習室で筆頭著者と2名で3時間20分間

を持つことになる。C氏は次のように言った。

「O7:よくあるパターンで。で、別に長距離がしたいとか短距離がしたいとかじゃなくて。ま、普通にかっこは普通普通ぐらいに速いな、っていうぐらいで特別速いわけではないですけど。入ったら、ちょうどその監督だった顧問の先生が、D中学校っていう市の市立D中学校なんですけど、そこに来て、大卒で2年目の先生で。ま、たまたまその先生に憧れて入ったわけじゃなくて、入ったらたまたまその人だったという。その人が一人暮らしで、ちょうど自分の自宅の近くに住んでたのもあるんですけど、まあ、怖いけどお兄ちゃん的な感じのどういうんですか、そういう先生で。だから顧問でもあるからっていうのもあるんですけど。日曜日はその先生ちに行ったりですね。」

「O86: (前略) そうなんです。中学校の体育の先生になりたい、それはA先生への憧れなんですけど、E高校(A教師の母校)へ行きたい、その延長線上には中学校の体育の先生になって、陸上部をもって、A先生の学校をやっつけてやる、ぐらいの、張り合ってる、っていうようなのがあったので、大学には行きたかったです。体育の先生になるためには、大学に行かなきゃいけない、っていう情報は分かってたので。だから(高校)1年の時から、夜中泣きながら勉強してました。」

そのA教師の体育実技授業は、実技能力の高い生徒が一斉指導の場面で、全員の前で高いレベルの実技の示範をして褒められる授業であり、実技能力の高い生徒が活躍する授業であった。C氏はA教師の影響を受け、図1に示された「0:もともと実技力のある生徒が活躍する体育授業」という授業観を持つことになる。他方、C氏が中学校2年生になり、保健体育教師はB教師が担当することになった。そのB教師の保健体育授業はA教師とは全く異なるものであった。そのA教師とB教師の保健体育授業についてC氏は以下のように述べた。

「O15: B先生、でしたかね。下の名前ちょっとよく覚えてないですね。B先生。で、授業スタイルが全く違うタイプをされてたんで。だから、1年の時はそれこそ〇〇大のイケイケのA先生で、僕なんかはかわいがられてた方だから。『ちょっとやってみ。』とか、こう見本やれとか。出来ようが出来まいが、なんか前に出さされたりして。体育の授業の

時にはやらされてたりしたんですけど。で、B先生は、それも後から思うと、ですけど、そこ書いてますか? バレーボールの触球数調査をしたり、タッチフットボールをしたり。覚えてるのはその2つくらいですかね。強烈だったです。多分それが。その上手い子、まあ、中1の頃、上手い子が前出て見本するとか何かするっていう感じで僕なんか出さされてたんですけど、そういう授業じゃなくなったんですね。だからある意味、活躍で、自分が今までのように目立った体育じゃなくなっただけで、不平不満までは思わなかったんですけど、何か違うなー、っていう。<後略>」

A教師の体育実技授業は、実技能力の高い生徒が活躍する授業であった。他方、B教師の体育実技授業は、対照的な授業だったという。「2:実技能力の差なく全員が認められる体育授業との出会い」でC氏はB教師のバレーボールの授業について次のように言った。

「O16: その、自分からみると、そう上手いチームじゃない相手の人と相手のチームが、セッターが上手いから上手になるんですね。ゲームが成り立つ。で、こっちはまあ、友達とかも色々身体能力は高いのがあるんだけど、セッター次第で上手いかわからないから、すごくなんか「上手いかわかないー」っていうのを思ったのが、触球数調査でした。…」

B先生のバレーボールの実技授業では、C氏達の身体能力の高い生徒が親しい仲間同士で作った班が、バレーボール競技のセッター経験者を中心とした身体能力のそれほど高くない仲間が集まっている班に試合で勝てない状況があったというのである。B先生は、民間教育研究団体の学校体育研究同志会で開発された教材や指導法を用いて、身体能力の高くない生徒が集まる班に練習方法を指導し、味方の班内でボールをセッターにパスし、ネットを隔てた敵のコート内の空いているスペースにボールを落とす攻撃ができるように攻撃の仕方を教えたと予想される。B教師は、もともと身体能力の高い生徒の集団が試合で活躍する授業ではなく、すべての生徒がバレーボールの攻め方の知識と基礎的運動技能を身に付ける体育実技授業をめざしていたと推測される。

さらに、「2:実技能力の差なく全員が認められる体育授業との出会い」でC氏はタッチフットボールの授業について次のように言った。

「O16：…タッチフットボールはそれもよくフォーメーションとかを教わった覚えもないんですけど。一番強烈に覚えているのは、その一人一枚作戦カード、こんな画用紙切ったようなメモ書きに、作戦考えてきて、それ一人一枚作戦考えてこようっていうので、きて、何人かのチームが言ったんだと思うんですけど、みんなのカードをこう集めて、シャッフルして、で、こう当てずっぽで引いて。それをとにかく出たのをやろう、っていうのをやったんですね。やっただんです僕ら。で、それを何となく僕の頭の中では、なんか『あ、民主主義だな』と思った瞬間はありました。要するに上手い下手で、上手いやつが、『ああするで』『こうするで』って言って進んできた体育の授業が、なんか皆、公平に平等にカードを引くっていう行為で、作戦が平等に認められる可能性がある、みたいなのを勝手に民主主義だなって思ったのが、記憶はあります。で、どんなプレーをしたかとかっていうのは、一切無いんですけど、そのシーンだけは何となく覚えていて、ただまあそうは言っても、部活三昧です。部活のためだけに、中学校は学校に行っていました。」

B先生は、タッチフットボールの実技授業では、1回1回の試合の攻撃の動き方の知識と動き方をパターンに分けて一斉指導で全員に指導し、各班で生徒自身がその攻撃の仕方のパターンを応用して自分たちの班の作戦を練習で作し、生徒たちに班内でどの作戦を用いて試合を行うかを決めさせる指導を行っていたと推測する。タッチフットボールは、攻め方が複雑な攻防混合型のボール運動の中でも、試合での攻撃権が連続して同じチームに与えられ、その攻撃が1回1回区切られていて、1回の攻撃の前後にハドルという作戦会議を持つルールである。そのため、作戦を班内で合意してその通りに動くという学習課題が明確であり、自分たちの作戦が成功したかどうか判定しやすい教材である。B教師は、実技能力の有無にかかわらず、授業で生徒の共通の学習課題を設定し、すべての生徒が作戦の成功不成功を考えて練習する授業を指導していたと推測される。

また、B教師は、校務分掌上の生徒指導担当教師として、校内暴力で荒れていたD中学校の生徒の行動を、管理主義的な方法ではなく、生徒会を母体にした中核的な小集団を彼らの要求を基礎にして教師が組織し、生徒自身で生徒集団を統率する方法で校内暴力を鎮静化する指導を行っていた。C氏は、そのようなB教師の姿について次のように述べた。

「O25<前略>まあ3年は荒れてましたね。2年も荒れてて、1年もそれなりに荒れていくという。ただ、それこそ2年生の時にいた体育のB先生は〇〇中学っていう、市内でも相当悪い、当ても悪かったんで、その生徒指導とかもしてたのもあって、その人が来たときに、D中を変えよう、みたいな雰囲気は、その人中心にはあったようです。だから良い意味でも悪い意味でも目をつけられていた、僕らの集団はですね。まあ、悪かったですね。でも僕らが3年になった時には要するに、僕らと周りにいた連中は、そのB先生がある程度の信頼をするようになって、大荒れしなかった年なんです。」

C氏はB教師との学校外での活動について次のように言った。

「O31：はい。だから僕らが2年の時、ま、3年に手をやきよっちゃったんですけど、3年になる時の春休みに、なんか『キャンプいくぞー。』とか言って、僕ら15人ぐらい賑やかな方の男の子を全員一緒にB教師とキャンプに行きました。」

C氏は、中学校時代に対照的な体育実技授業を経験していた。結局C氏は、A教師にあこがれて、保健体育教師になり、実技能力の高い陸上部の顧問としてA教師と張り合いたいと考えた。その後1981年4月、A教師の母校である県立E高等学校の普通科に進学し、全国駅伝大会常連校の陸上部で長距離選手として3年間活動する。しかしながら、C氏は全国レベルの競技大会で活躍することはできなかった。ただし、C氏は憧れの保健体育教師になるために大学に進学する夢を捨てず、陸上部の寮で受験勉強を続け、1984年4月K大学教員養成学部中学校保健体育養成課程に進学する。

3-2. K大学教員養成学部からK大学大学院学校教育研究科への進学

C氏は、大学の学部3年生の時に転任してきたF氏の保健体育科教育法の授業のエピソードを次のように述べた。

「O198：そういうのを話をしたな、って。後から、穴があったら入りたいと思いますけど。F先生の授業で最初に発言したのはそういうことだったんで…で、まあ、一番やっぱり、あの、数値を見せられて、後ろで、さわってない子が学んだことは何かとか、喜んで良いのか、とか喜べるのか、とかっていうのを言われた時に、僕はそういう中学校1年生

を過ごしたんですね。中学校2、3年生は違ったのかな、っていう。だから僕両方学んどるっていうか、両方経験があるって思って。」

C氏はF氏の講義で触球数調査の体育授業に触れ中学時代の体育授業を思い出した。学校体育研究同志会の創始者のひとりであるF氏は、保健体育科教育法の授業で、F氏が高等学校教諭時代のバレーボール実技授業で指導した触球数調査を教材に、ボール運動の試合で生徒が何を学んでいるのかという教育内容や教育目標を問うたのである。その際にC氏は、中学校1年生の時に経験した「概念名0：もともと実技力のある生徒が活躍する体育授業」と中学2、3年生の時に経験した「概念名2：実技能力の差なく全員が認められる体育授業との出会い」の双方を自分自身が実際に経験していることを自覚したという。

C氏は、K大学大学院学校教育研究科への進学を選択する。その進学の動機について以下のように述べた。

「O209:こんなに疎外感…で、ですから、なぜか、って言われたら、その、まずはこのまま、3年の中頃ですかね、後半なってからか、このままあと1年で社会に出ることは嫌だな、っていうのは思いました。で、それと、その武器をちゃんと持ってないとまずいな、って。で、僕は陸上の武器はもう無かったので。で、その、E高校を振りかざして生きようとも思ってなかった。生きれるとは思ってなかったので、ですから何か武器を持たなきゃいけないよな、っていうのは一方で思いました。だから、理論武装する、っていうか、それで負けんぞ！みたいなのは、何か持つて出ないと不安だな、っていう。」

C氏は、知識を獲得することで実技力の高さ以外に教師としての武器を持ちたいという気持ちが大学院進学動機であると述べた。これが、概念「13：教師としての理論武装が大学院進学動機」の発話である。

C氏の学部時代は、主免許の保健体育教諭1種免許と副免許の小学校教諭1種免許の双方について、それぞれ教育実習が4年次に開講されていた。すでに大学院進学を決めて教員採用試験は受験していないC氏は後期にまず中学校で4週間の教育実習を履修し、その後小学校で2週間の教育実習を履修した。そこで、それまで中学校保健体育教師を志望していた気持ちが小学校教師の志望に変わったと次のように述べた。

「O251：『せんせい』って来てくれる感じが、子ど

もの頃に、従兄弟と一緒にいたような。こういうの好きだったな、っていう。手を引っ張ってグルグル回してあげたり、っていうのが、5年生でしたけど。そういうのが楽しくて。そこで、一発で決めました。その2週間含め実習で。あ、これは小学校だ。」

もともと子どもが好きだったにもかかわらず、大学進学時に小学校教師を志望しなかった理由についてC氏は次のように述べた。

「O133：むしろ、僕なんかは親族多かったので、年下の従兄弟とかがいっぱいいたんですよ。あの、だからお正月じゃ、お盆じゃ、そういう時に子どもの相手をするのは大好きだったので、だから、そういう意味じゃ、子どもは好きだったんですよ。子どもの頃から。でそうやって『お兄ちゃん、お兄ちゃん』って一緒に遊んで、っていうことは大好きだったので、子どもは好きなんだけど、小学校の先生は、僕が先生嫌いだったので、子どもから嫌われる先生なんてなりたいとは思わない、って小学校の時は思っていました。」

3-3. 体育授業観の形成

1993年4月に、C氏はL町立M小学校教諭として採用され4年間在籍し、1997年4月にN町立O小学校教諭に転勤する。その1年後、1998年4月にK大学附属小学校体育専科教員として採用され、2012年3月まで14年間学級担任、体育専科教師として勤務した。

C氏は、公立小学校の5年間は学区の小学校体育研究会体育部会に所属し、公立小学校勤務最後の1997年8月に学校体育研究同志会の中国ブロック大会でバスケットボールの授業実践の報告をして入会した。そのころの気持ちをC氏は以下のように述べた。

「O306：全くないです。あと、頭のどっかで、F先生が『現場に出て3年、実践記録を書かないやつは、一生書かないんだよ。』って言われたので。言われたのがどっか頭にあって、『あー、3年過ぎちゃったなー』っていうのを思ったのは確かです。」

C氏は、1998年4月にK大学附属小学校体育専科教員として赴任後、毎年度2月に開催される公開研究会で授業を公開し研究発表を継続して行った。同時にC氏は、1998年8月の学校体育研究同志会全国大会から同会のフラッグフットボール分科会に所属し、フラッグフットボールの教材や授業研究を継続的に行った。そして、このフラッグフットボール分科会で行った教材研究の成果を附属小の体育授業研究で実験的に

実践することになる。同時に附属小の授業研究では様々な教材を扱うことが専門性の幅を広げることを同僚の10歳年上のG教師から薫陶を受け、様々な教材を校内研や公開研の授業研究で実践することになる。

C氏は、「概念名24：附属小の体育授業研究で様々な教材を扱う意味」に含まれる発話で、学校体育研究同志会での活動と附属小学校での授業研究の関係を次のように述べた。

「O347：そうですね。あの、1年目の時に初めて同志会の夏大会に行ったんですよ。そんな時に何でフラッグを選んだのかは分かんないですけど。ま、自分がフラッグフットボール、中学校の時にそれこそさっきのタッチフットボールやった、とかっていうのも、大学に来て、またF先生のフラッグフットボールの話が出てきた時に、僕、これやったことあるぞ、みたいなのがあって。で、現場に出てからも、L町とかでもやってたんですよ。タッチフットを。で、そんなのもあって、フラッグに出たんですね。そこがまあきっかけで、フラッグの分科会に関わるんですけど、そこで、あ、研究会って何か分かんないんですけど、やらなきゃいけないのが1月2月に来るから、今日ここで仕入れた情報が何かしたいな、ってまず思ったのは確かです。」

同時にC氏は、K大学附属小学校で毎年2月に行われる公開研究会では、様々な教材を扱って体育授業研究の力量を全体として高めることを自覚していたと次のように述べた。

「O350：で、この2年目に言われたか3年目に言われたか分からないですけど、G先生に、とにかく、どういう言い方だったかな。専門、っていうか、同じ種目だけやるようにはするなよ、って言われたんですよ。だから、研究会とかが、そこで勉強するきっかけになるから、何をしようか、っていう時に色々なことを選択肢として考えて欲しい。その方が、こう、指導の幅が広がるというか。っていうふうに言われたので、言われたこともあって、確かにそうだな、って思ったから、1年目陣取りゲームした時に、2年、えっとこの当時同志会は、つながりを考えてたんですね。6年までどうやっていこうとか。だけど、2年目でそれしたかったけどやめて、違う系統のドーナツボールをやって。で、その年は全然得意でも何でも無いんだけど、鉄棒って。」

附属小学校に赴任し小学校体育専科教師として体育

授業研究を進める過程で、C氏は、「概念名32：体育の目標は運動技能の習得であり結果による競争ではない」という体育授業についての考え方を持つにいたる。C氏は次のように述べた。

「O425：まあ、どうですかね。僕はだから今でも一方で思うんですけど、点とかつかないんです。授業で、あんまり。記録して、どっちが勝った、とかあんまり言わないんです。どうせ言うから、子どもが勝手に。それは僕が言うことではない。昔は思ってたんですよ。勝つか負けるかとか。フラッグフットやってた時なんかは最初、そうですね。勝つか負けるかのところで何をするか、っていうのは、すごくリアルな選択になって、エゴも出るし、っていうふうには、そういう追い込み方をしたこともあるんですけど、あんまりそういうのは、後半思わなくなりました。それは勝手に言うから。特に低学年なんて、得点なんてつける必要、全くないって。むしろ、上手くやりたいこととか、これが上手くいったかどうか、っていうのをよく聞いてたんですね。シュートをきめよう、っていう時間だったら、『今日はシュート決まった?』って聞けば良いし。パス、シュートってなったかっていいたら、そういう聞き方をすればいいんですけど。でも世の中、点をつけてしまって、点を記録するんですけど、そこに、誰々がシュートしたっていうのは見えないので。それを聞かなくなったのは後半ですね。」

C氏は、運動や戦術がわかってできることを目標に考え、運動の結果の採点や得点を授業で子どもに記録させることをやめてしまったという。ここには、競争の結果が他者より優位になることをめざす子どもを育てるのではなく、運動技能を習得すること自体をめざした子どもを育てたいという体育授業の考え方が示されている。

2004年4月、C氏は著名な体育科教育の民間雑誌の懸賞論文に応募し、フラッグフットボールの授業研究で1席となり表彰された。この掲載論文は、赴任後6年間のフラッグフットボールの授業研究の集大成であった。また、2005年10月、C氏は単著の実践記録を出版する。この実践記録には、K大学附属小赴任3年目の低学年の「地球周りを入れたお話鉄棒」の授業研究に始まり、2005年2月の公開研究会で発表した高学年のマット運動「ネックスプリング」までの7年間の授業研究が加筆修正され掲載されていた。

出版された単著の実践記録に掲載された教材は、低学年では水遊び「呼吸と浮きの感覚づくり」、ボール

遊び「スペースの発見と活用」が掲載されている。中学年では、マット運動「側転を入れた歌声マット」、水泳「ドル平泳法」、陸上運動「タイヤ投げ」、フットボール「スペースの創出と活用」、高学年のマット運動「ネックスプリング」、水泳「ドル平泳法から近代4泳法へ」、フットボール「作戦の組み立て」、と様々な運動領域の教材を用いた授業研究が掲載されている。本書は1998年4月K大学附属小赴任後の7年間の体育授業研究のまとめの意味を持っていた。

単著の実践記録に掲載されている2002年度に担任した学級の3年生、マット運動「側転を入れた歌声マット」の実践記録を見せたところ、C氏は「概念名26：ここまで引っ張り上げる授業」に分類された発話の中で次のように言った。

「O377：あの、うーん、まだ教えようとしてますね。こう教えれば、ここまで引っ張り上げる、っていう発想でしかないです。フットボールを考えてる時もそうです。ここまで引っ張り上げる。ネコちゃん体操にしても、マットにしても、ここまで引っ張り上げる、っていう。そういう教師の関わり、でしかないですね。(後略)」

この授業研究は、学校体育研究同志会で開発された歌声マットを1単元20時間かけて教えた実践記録であった。C氏は、この段階では「ネコちゃん体操にしても、マットにしても、ここまで引っ張り上げる、っていう。そういう教師の関わり、でしかないですね。」という。

ネコちゃん体操や歌声マットは学校体育研究同志会で開発された教材である。この段階でC氏は、これらの教材を用いて教師のねらいのここまで子ども全員を引っ張り上げるという体育授業観を形成していた。そうした体育授業観は、次の2つの契機で変容することになる。第1の契機は、K大学附属小赴8年目の2005年度に6年間持ち上がった学級の子どもたちとの担任としての苦しい体験にあった。第2の契機は、K大学附属小赴8年目に小学校2年生になる長男の親としての子育ての体験にあった。

3-4. 体育授業観の変容

第1の契機である学級の子どもたちとの担任としての苦しい体験を、「概念名30：受験で声の届かない6年を担任」に分類された発話でC氏は次のように述べた。

「O390：まあ、最終的に崩れた、って感じですかね。受験の頃に。こんだけ言葉が通じなくなるのか、っ

て。諦めた、って感じですね。あんだけ言葉が通じて、あんだけ分かると思ってたのに、何で受験ごときでここまで人間は崩されるんだ、って思いましたね。だから次の年はもう絶対そんなんでも崩れない子に育てようって思って。崩れないクラスに育てよう、って思いましたね。」

C氏は、1年生から6年生まで2回のクラス替えを経て学級担任を持ち上がった6年生が、受験を前にして担任の声が届かない学級になってしまい、学級担任として悩み落ち込んだ。この体験は、体育専科教師としての学級担任が受験指導で限界を持つことを自覚し、再度体育専科教師の学級担任として子どもたちの進路にどのような未来を描くための能力を育成できるのかを真剣に考える契機となった。その後C氏は、子ども自身が授業での運動体験を経て自分で動きを獲得していくことをめざす体育授業観へ考えを転換していった。同時にC氏は、学級担任としてどのような教師であるべきかという教師観が転換したと、「概念名28：保護者と子どもの生活の悩みを共有」に分類された発話で次のように述べた。

「O432：僕が明らかに変わりました。親に強くなった、っていう。だから、1、2年は3回担任してるんですけど。最初の1、2年。次の3、4年。で、9、10年もってるんですけど。」

「O434：<前略>一番には、親の気持ちがかかってない、っていう。教師として、親の気持ちを理解できないのは大ですね。だから教師としての伝えるべきこと、っていうのはなんか、きつくでも伝えてたと思うんですけど、3回目の時は、『そうですよね、内もそうなんですよ』、っていう言葉がついて伝えられるかもしれない。その違いはすごくあったと思います。だから親からは、もしかしたら僕が言うことは反発でしかない。きつい指示でしかなかったかもしれないですけど、3回目の時はちょっと共感的に受け入れてくれながら、でも、アドバイスしてくれる、くらいのことだったかもしれません。だから、宿題をしましょう、とか、忘れ物をしないようにしましょう、とか、そういったことを保護者に伝える必要があった時に、『お母さんちゃんと伝えてください、やってくださいよ』っていうような言い方だったかもしれないです。だけど、3回目になったら、『まあ、そうですよね。なかなか大変ですよ。朝。でもね、お母さんやっぱりうちだったら、前の日ね、こう、やっとう、とかってやってるんです

よ]、って感じで言ってると思います。]

「O437: (同僚の先生を例に出したあとで:引用者注) 僕は人間性だと思ひ込んでるんですけど。この人すごいな、って後から思いました。僕もこういうふうになり、やっと言えるようになった。それと、やっぱり、どういんですかね。受験が成功することが、この子の幸せとは限らない、っていう事例をいっぱい見てきた、っていう。だから、親と、最終的には喧嘩が出来る。いっぱい変な例も見たので。お母さんがそこまでなっちゃうと、子どもがしんどいだけだ、とか、子どもにも、そんなにしんどいんだったら、先生がお母さんに言ってあげる、とか。っていうようなことが、最後の時には言えたんですよ。それまでは、頑張れよとかしか言えなかったんだと思います。それが、親にも言えるようになった。」

C氏は、自分の子育てでの体験から親の願いと子どもの思いが異なることのしんどさを体験し、保護者が抱く悩みを教師として共有して寄り添う態度や発言をするようになった。その結果、学級担任として保護者と協力して児童の成長発達を促すことができるようになったのである。学級担任として子どもたちの思いを理解する姿勢は、次の第2の契機と共通していた。

「概念名33: 我が子を通して子どもたちが見えてきた」に分類された発話でC氏は次のように述べた。

「O410: あると思います。それは、ちょっとまた違う軸なんですけど、我が子がいた、っていうのはあります。ちょうど、この学年とぴったりなのがうちの娘なんですけど。長男はこれの2個上なんです。で、長男の方はそんなに運動上手な方ではなかったので、何でだろう? みたいなのを本当に、それこそ学校に連れてって、娘と息子が1年と幼稚園の時に、夏休みとか行って、〇〇しようじゃ、ボール投げしようじゃ、って色々飛び箱とかやったりしてて、それこそ息子はなかなか苦手なだけで、娘が縄跳びとか飛び箱とか、パンッてやったりしてて、これ、何が違うんだろう? とか、そんなのを思っていましたね。だからうちの息子に、こういう子にどういう働きかけが出来るのかな、っていうふうなのはすごく。そういう意味で、言葉はあれですけど、実験台みたいなのが目の前にいて、どうしたら良いんだろ? どういうふうに言えるんだろ? とかっていうのがあって、授業ではそういうふうなのが子どもたちは見えてきて、だから、やっと我が子を通して、その子どもたちが見えてきた、っていう感じはしますね。だか

ら、それ自体が授業になってる、というか。]

「O411: はい。だから、そういうタイミングだったんだと思います。色んな。で、うちの娘なんかが、まあ、でもあれ大分後ですけど、水泳とか苦手で、学校の授業のこととかを、「全然意味が分からん」って言ってたんですけど、水の中で泳いでるのを見て、「ああいうふうにするんだよ。じゃあ、みんなやっごらん」って言われて、「水の中なんか見えんし」とかって言いながら、帰ってきてたんですね。それで、ああ、そうだなって言う、聞きながら思ったり。だからじゃあ、水の中でどうやってやるんか、っていうのを子どもたちにどう見合いこさせよう、とか、そんなのはすごくヒントにしましたね。ヒントに言うか、我が子を通してそういうふうに見だした。今までは教え込んでたな、引っ張り上げてたな、っと思います。2廻り目、くらいですか。最後の6年生の子たちが1年生になる頃にはそういうことを1年生の頃から、考えて授業してたな、っと思います。」

C氏は、運動が苦手な長男に運動の過程をどう説明するかという体験を経て、苦手な子どもと目標とする運動の実技レベルをどう合意し指導すればいいのかを自覚的に考えるようになった。また、C氏は、水の中の運動を子どもたちがどのように見えているのだろうかと考え、プールの中に防水ビデオを持ち込み、水中の子どもたちの動作を記録し子どもたちに自分自身の水中の動作の動画を見せるビデオ教材と授業を開発していた。のちに、娘が水の中の運動なんか水の上から何も見えないと発言したことから、水の中の運動を子どもたちに見合いこさせる方法がとても意味があると確信するに至った。

こうして学級担任として子どもの思いを理解するとともに、我が子を通して子どもの運動の理解の仕方に注目した結果、体育授業で子どもがどのように運動を理解するかを視点にして教師の指導を考えていくという体育授業観にC氏の考え方は転換することになる。

「概念名27: 場を提供して押し上げる授業」に分類された発話で、2006年春の校内研修で公開し、『学校教育』誌の2007年1月号に掲載された「第1学年『ネコちゃん体操をしよう』の実践より」の実践記録を前に、C氏は次のように述べた。

「O395: この頃ですね。要するに、感覚的に育てるところを、たっぷり時間を取るよ、っていう、その、なんか技の習得とか、っていう、技術ポイントあげ

て、これをもってというようなことにはいっぱい時間を取る低学年の授業じゃなくて、低学年はもっと活動しながら、やってみて良いんじゃない、って思えるようになった。」

C氏は、2002年度に学校体育研究同志会の山内基広氏が開発されたネコちゃん体操という教材を実技研修を通して初めて学び、すぐに器械運動の教材として取り入れた。ただし、当初は「概念名26：ここまで引っ張り上げる授業」の考え方で、授業の目標達成に効果的な教材として指導していた。ところがC氏は、2006年になり、体育授業自体が「概念名27：場を提供して押し上げる授業」に変容したという。

「O396：この時1年生担任ですよ。だから、初めて、山内先生の実技を受けて、「よし、来週すぐやろう」って思ってやったのが、1年生と3年生やった時に、自分もってたのは3年生だったんですよ。1年生にもやって、この子たちの上手になり具合と、自分が担任してるクラスの3年生の上手になり具合が、全然違うんですよ。やっぱ1年生が早い。っていうのがあって、今度1年もったら、本当に伸び伸びと、良く出来るんじゃないか、上手くいくんじゃないか、っていう。こう、引っ張り上げるっていうよりも、支える。場を提供して押し上げてあげるっていう感じで、支えていけば、っていうのが、さっきの写真なんかもそうなんですけど、要するに自分もってる、担当してる子たちですよ。だから(ドル平とネコちゃん体操の動作の共通性)を書いていることを指摘されて：引用者注)この段階で書くのも、ちょうどこの1年生の前期ぐらいからちょっとやってみようようなことが、上手くいってるっていうのを思ってるから、書いてるんでしょうね。」

山内基広氏の開発したネコちゃん体操の教材の背後にある開発者の運動指導と子どもの内面の考え方から影響を受け、子どもを教えたいところまで引っ張り上げる授業ではなく、準備運動で感覚づくり的な時間をたっぷり保証しながら、場を提供して押し上げる授業へとC氏の体育授業観は変容した。もちろん、山内基広氏との授業研究を通じた交流に加え、学級担任として子どもの想いを受け止める教師の役割を自覚したこと、我が子の運動の理解の仕方から子どもの運動の

観察や理解の仕方を変える必要を自覚したこと、が重くなって、C氏の体育授業観の変容が生まれたのである。

4. まとめと課題

本稿はC氏を対象とした本研究の第1報として、「授業スタイル」の形成の基盤となる教師としての信念の内容とその信念をもつにいたった契機を報告した。今後の課題は、体育授業、子ども、学級担任としての教師、これらについての教師としての信念の形成と変容を基盤として、C氏の「授業スタイル」が形成され変容した過程を検討することである。

【文献】

- 藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治(2006)『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』溪水社。
- 藤原顕(2007)「現代教師論の論点」グループ・ディクティカ編『学びのための教師論』勁草書房、pp.1-25。
- 木原成一郎・林俊雄・大後戸一樹(2016)「授業の力量形成に関するライフヒストリー研究 A 氏の体育授業を中心に-」『学校教育実践学研究』第22巻、pp.217-227。
- 木原成一郎・林俊雄・大後戸一樹(2017)「授業の力量形成に関するライフヒストリー研究(その2) — A 氏の体育の「授業スタイル」を中心に—」『学校教育実践学研究』第23巻、pp.81-91。
- 木原成一郎・小田啓史・大後戸一樹(2018)「授業の力量形成に関するライフヒストリー研究(その3) — B 氏の体育授業を中心に—」『学校教育実践学研究』第24巻、pp.149-156。
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂。
- メリアム(2004)『質的調査法入門』ミネルヴァ書房。
- 森脇健夫(2007)「教師の力量としての授業スタイルとその形成」グループ・ディクティカ編『学びのための教師論』勁草書房、pp.167-192。
- 鈴木淳子(2002)『調査の面接の技法』ナカニシヤ出版。
- 高井良健一(2015)『教師のライフストーリー』勁草書房。
- 山崎準二(2002)『教師のライフコース研究』創風社。